

補^ふ嚴^{がん}寺^じ参^{まゐ}る

第一話 虎追い

多数のコマーシャルメールに埋もれるように、「補嚴寺参る」という件名のメールがあった。僕はメールをクリックした。本文は「補嚴寺参る。八月五日、午後八時より」とある。

補嚴寺は、僕が住む百軒ほどの住宅団地を出て、川沿いに細い道を辿り十分ほど歩いたところにあるさびれた寺だ。朝のウォーキングで通ることがあるが、入ったことはない。古い瓦屋根の小さな門があり、いつも閉まっている。外からは門と鐘楼しか見えない。中に庫裏があるらしいが人の気配はない。一度横手から入ろうとして、隣家の犬に吠えられた。それっきり入ろうとも思わない。世阿弥のゆかりの寺だという説明の立札があったが、能は門外漢である。

寺の前に子供公園がある。妙にリアルな虎とリスの乗り物がある。姿も表情も玩具だが、生きているようでいつも見る度にハッとする。他にジャングルジムと鉄棒、塗料のはげたブランコがある。しかし、子供の姿を見かけたことはない。

七月の終わり、門前を掃く老婦人に声をかけた。彼女は寺の隣に住む人で、寺の世話をしている。檀家だと言うだけで、特別の縁はなさそうである。老婦人は、寺には誰もいない。本堂もない。夏は草が茂って大変だと歎いた。八月八日は世阿弥の命日で参る人がいるらしい。

二回目のメールが来た。「補巖寺参る。八月五日、午後八時より。虎を追い出します」。虎……。少し興味がわいた。何のことだろう。行かなければ永遠に分からない。それはいやだなあ。

「ひよっとしたら出かけるかもしれない」と僕は妻に言った。

「そんな夜中にどこへ行くの」と妻は聞いた。
僕はメールのことを話した。

「団地から外は真っ暗だよ」と妻は言った。
「たしかに」と僕は言った。妻は押入から懐
中電灯を取り出した。

「これで、完璧。でも、川に落ちたらいやよ。
あなたは泳げないから」。

「気をつける。でも、行かないかも」

「多分あなたは行くわ。強迫神経症だから。」

でも、虎が飛び出してきたら逃げるのよ。噛
まれないでね」

妻は笑いながら言った。

その夜は闇夜だった。団地から出ると、鼻
をつままれても分からない闇になった。懐中
電灯のスイッチをさぐっていると、目の前が
ぱっと明るくなった。前からやって来るのは
提灯だった。懐中電灯もいらないほど明るい。
浴衣の裾を端折った中年の男が近づいてきた。
「暑いことです。岩田さんですね」

僕は頷いた。

「補巖寺から来ました。和助と言います」

男は言った。男は僕の足もとを照らすように歩いた。川の音以外何も聞こえない。男は僕の歩く速さに合わせてくれている。

「虎を追い出しますって？」

僕は聞いた。

「屏風の虎を追い出して捕まえるのです」

男は答えた。何のことか分からないが、黙って歩くことにした。川面を渡ってくる風が意外に涼しい。

広い農道に出るまで、対岸に渡る橋は三本ある。他にも橋があるが、農地に行くためであつたり、家のためであつた。三本の橋は、渡ると決まって地蔵がある。地蔵は小さな地藏堂に東を向いて鎮座している。きれいに掃除されていて供花が枯れていることはない。補巖寺へは二番目の橋を渡る。

地蔵に蝋燭が燃えていた。特別な夜だと言っているようだ。地蔵に手を合わせた。ほんの十分ほどこしか歩いていないのに、ずいぶん

遠くへやって来たような気になった。坂道を下って集落に入る。子供公園が見えた。その奥が補巖寺だ。

補巖寺は村の西端にある。東に進むと、同じ苗字の大きな屋敷が続く。県の文化財にも指定されている庄屋屋敷だ。東の端に神社がある。大きな切り株があって、しめ縄が張られている。その周りにも木が多いが、ずば抜けた大木であったのだろう。神社の横を通り抜けると一面の稲田だ。今は初穂が出ている。

子供公園は夜のしじまに沈んでいる。虎とリスの人形の気配を感じる。提灯の明かりが人形に当たった時、二匹は僕の方を振り向いたように思った。

補巖寺の門は開かれていた。篝火が燃えていて、その一角が昼間のように明るかった。和助さんの姿が門に吸い込まれるように消えた。僕は急いで後を追った。石畳を進むと、小さな池があった。その向こうに見えるのは本堂らしい。老婦人が「ない」と言っていた

建物が整然とした趣で建っていた。

本堂に隣接した建物があつた。本堂と渡り廊下でつながっている。和助さんはその建物に僕を誘導した。踏石でサンダルを脱いで廊下上がった。和助さんが障子を開けた。

部屋の隅に先客がいた。痩せた小さな男だった。

「控室でしばらくお待ち下さい」

和助さんは男の隣の座布団を示した。男は僕の方をちらっと見たが、すぐに目を反らした。僕は小さく挨拶をして腰を下ろした。場違いなところへ来たような気がした。来なければよかったと思った。僕は小心者である。男も同じようだ。身を縮めて時々思い出したように額をぬぐった。夏の夜なのにあまり暑さを感じない。この部屋は涼しくさえあつた。部屋を見回したが冷房器具は見当たらなかった。しばらくすると、人の気配がした。和助さんの後から入ってきたのは、ハツとするほどの美女だった。年は二十歳になっていない

だろう。最も離れた部屋の隅に坐った。俯いてじっとしている。浴衣を着ていた。紺の生地に朝顔が咲いていた。和助さんは客の前に湯飲みを置いてお茶を入れた。何とか焼きだろう。高級そうな湯飲みだ。誰も手を出さない。僕が最初に湯飲みを手にとった。茶の香りが心地よかった。

―これから何が始まるのだろうか？―

熱い茶を飲みながら思った。

次に騒がしい音を立てて、背広姿の男達が入ってきた。年配の男を先頭に、若い男が三人その後続いた。男達は部屋の奥に向かつて横並びに座った。一番左の年配の男が口を開いた。

「えらい暑い日にご足労をかけます。私、木村均と申します。右に並んでいるのが長男、次男、三男です。他に娘が二人おります。貧乏人の子だくさんで」

男は音を立ててお茶をすすった。

「何してんねん、はよ自己紹介せんかいな」

ぼけっと坐っていた息子達が順番に名のつた。

「私で庄屋は二六代目らしいですわ。最初は室町時代でっか。家が大きいてええな思うの大間違いでっせ。掃除も大変、マンション住まいが夢なんですわ。まあ、かなわへんやろけど」

二六代目木村均さん。もちろん、名前を聞くのも顔を見るのも初めてだった。

「今夜は百年ごとの「虎追い」です。えらい時にあたったなあ。虎は普段は屏風の中で大人しうしてるんやけど、まあ、池の水を飲みに行く程度ですわ」

庄屋はお茶を啜って反応を待ったが、誰も何も言わない。仕方なしに湯飲みを置いて続けた。

「ほんで、百年に一回は追い出して、しっかり捕まえて、屏風に閉じ込めなあかんちゅうんが始まりらしいんですわ。せやないと、村の人間がひとり残らず食い殺される。まあ、

言伝えやけど。それで皆さんにお願いしたわけでございます。ええっと」

僕の方を見て言葉につまっている。

「A団地の岩田です」

僕は頭を下げた。

「そうや、岩田はんやった。岩田さんには

「虎追い」の見届け人をお願いします」

「何をするんですか？」

僕は聞いた。

「見とったらええんや」

長男が威圧的に言った。

「あほみたいにな」

次男が笑いながら言った。

「お客様に失礼やろ」

そう言いながら、庄屋も笑っている。帰ろ

うかと思った。

「次は、お嬢ちゃん。虎を追い出すんは、虎が懸想するぐらいの別嬪で十七才以下の生娘と決まってまんねん。十七才以下はようけおんねんけど、生娘がなかなかおらへん。うち

の娘もあかん」

庄屋は頭をかいた。

「別嬪ちゆう条件にも当てはまらへんわ」

三男が言った。庄屋は、「それもそや」と、

笑っている。

「ほんで、多おおの小夜ちゃんにお願いしたん

や」

娘は無表情に頷いた。

「最後は飛び出してきた虎を捕まえる役や。

前回の明治の時は、十とういち市村の十両の力士がや

ったらしい。せやけど、今回は横綱や。八郎

君頼むで」

八郎と呼ばれた青年は体を震わせて頷いた。

そして、小さな声で言った。

「横綱いうても指相撲の横綱や」

障子を開けて和助さんが入ってきた。

「用意が出来ました」

和助さんが言った。

「ほな、行こか。それと、い……」

「岩田です」

「せや、岩田さん。最後に言うのかな。あんたは、見届け人やから、どんなことがあっても手を出したらあかん。じっと見とくんや。あんたには何にも起こらへんよって」

僕は頷くしかなかった。

和助さんが先導して、庄屋を先頭に渡り廊下を歩いた。外陣から障子を開けて本堂に入る。灯明が燃えていた。和助さんが、それぞれの席に案内した。一番前の布張りの床几に小夜さん、その横に少し下がって八郎君。その後ろに僕だ。僕の背後に庄屋一家。外陣に和助さんが控えた。本尊の前で老僧が一人読経していた。布張りの床几に小夜さんの形のいいお尻がのっている。八郎君は人差し指と親指を盛んに曲げたりしている。虎と指相撲をするつもりらしい。小夜さんはまっすぐに前を向いている。

「虎なんか出てきいひん」

「出てきたら、動物園に売ったる」

後ろで庄屋の息子達が話している。落ち着

かない連中だ。がさがさと動いている。

若い男が二人がかりで屏風を運んできた。

そして、屏風を置いてさっさと出て行った。

庄屋に促されて次男と三男が立ち上がり、屏風を開いた。その瞬間、虎が小夜さんめがけて躍り出た。小夜さんは手を合わせて小さくお経を唱えた。虎は少しひるんだようだ。

「八郎君！」

庄屋が叫んだ。長男と次男は部屋を飛び出したようだ。三男は腰を抜かして起きようにも起きられない。何か叫んでいる。虎は小夜さんを睨みつけ、うなり声をたてた。八郎君はと見ると、親指を立てて人差し指を虎に向け、「いざ、勝負、勝負」と叫んでいる。次の瞬間虎は小夜さんに飛びかかった。灯明の明かりに鮮血が飛び散った。僕は小夜さんに駆け寄った。

「動くな」と庄屋が言った。灯明の火が消えた。真の闇になった。

「帰ったようです」

和助さんの声がした。提灯の明かりが近づいてきた。本堂には誰もいなかった。目の前に屏風があった。和助さんが提灯を近づけると虎がいた。じっと僕の目を見ていた。その口元が真紅に濡れていた。

「和助さん」

そう言ったとたん、僕は、補嚴寺の門の前に立っていた。振り向くと和助さんの提灯の明かりが闇の中にひときわ輝いていた。

第二話 幽霊

ポストに案内状が入っていた。

「補嚴寺参る。八月十四日、午後八時より。」

阿茶様あちや供養。盆供養も行います」

「阿茶様って誰？」

案内状を覗き込んで妻が言った。

「知らない」

僕が答えると、

「あちゃ」と、妻は珍しく冗談を言った。僕

が驚くぐらい珍しいことだった。

「行くの？」

「行かない」

そんなことよりテレビの巨人・阪神戦の方が気がかりだった。阪神が勝つかもしれない。

阪神が好きと言うより巨人が嫌いだった。結局阪神が珍しく勝ってゲームは終わった。

i p a dにメールが来ていた。

「補蔵寺参る。追伸。阿茶様が出席されま
す」——本人が出席するの。幽霊じゃないか——

僕はi p a dを閉じながら思った。そして、その件は忘れた。

八月十四日。ドアホンが鳴った。モニターに和助さんが映っていた。この前と同じ柄の浴衣を着ていた。

「お迎えにあがりました」

とにかく玄関を開けた。

「無理強いみたいになりましたか」

「いいや、僕も行くかと思ってました」

意志薄弱。これが僕の欠点である。これが

なければもっと出世しただろう。急いで半ズボンを着替えた。

団地を出ると上弦の月が出ていた。空はまだ明るい。少し涼しくなった気がするが蒸し暑い夜だ。二番目の橋を渡る。地藏に蝋燭が燃えていた。この地点から温度が下がった。少しずつ違う場所に歩を進めているのだろう。盆踊りをしているようだ。風に乗って聞こえてくる。

「今夜は落語もあります」

和助さんが言った。

「落語？」

「二つ目だか三つ目だか、聞いたもんじゃありません。短いのが救いです。五代目桂文枝はよかった」

「今は三枝ですね」

「あれはダメです」

一言で切り捨てた。

「五代目の桂文枝をお聞きになったんですか」

「ええ、補嚴寺に定席を持ってました」

僕はもちろん知らない。

公園に着いた。今日は子供たちが四、五人遊んでいた。虎とリスに子供が乗っている。

虎もリスも楽しそうだ。

門は開いている。前と同じで、篝火が燃えていた。門をくぐると、空気が一変した。

「ここから、変わるのだ」

二回目だから少し落ち着いていた。

控室の障子にいくつか影が映っている。女もいるようだ。踏石から廊下上がった。先に立った和助さんが、ひざまずいて障子を開けた。庄屋がいた。息子達の姿はなく女が二人いた。娘だろうか？ 村人らしい男が七、八人いた。膳が用意されていて酒を飲んでい

る。

「やあ、すんまへんなあ。い……」

「岩田です」

「せや、岩田はんや」

庄屋は顔を真っ赤にしている。ろれつも少

しおかしい。僕は空いている膳を手で示された。酒は嫌いな方ではない。喜んで座った。出囃子が鳴った。障子を開けて落語家が入ってきた。正座して障子を締め一番下座の大きな座布団に座った。

「ええー、今夜は阿茶様供養と言うことで、あちゃ、なんて」

妻と同じレベルだ。誰も笑わない。勝手気ままに喋っている。僕は手酌で飲んだ。

「えらい気のきかへんことで。克子、お客に酌せんかいな」

克子と呼ばれたのは浴衣を着た大柄な女だった。もう一言つけ加えるなら、とても不細工な。女は僕の前にドタッと座った。化粧の匂いに顔をそむけたひょうしに、落語家と目が合った。落語家は注目されていると思ったのだろう、もみ手をして嬉しそうに笑った。「お後がよろしいようで」

終わったようだ。落語が終わると、男達の会話が耳に入ってきた。

「それで、十年前は出たの？」

「出なかったそうだよ」

「二十年前も三十年前も出なかった。じいさんは？」

「俺が生きている間は、出たって話は聞いたことがない」

「やっぱり迷信だ」

横から鉋子を持った手が伸びてきた。所在なさそうに座っていた中年の男だ。僕は頭を少し下げて猪口を差し出した。

「小学校の教師をしています。阿茶様は村の方ではありません。村では十年に一度、他の大字だいじの人を呼んで供養をしています」

「それで僕が呼ばれたのですか。どうして僕なのですか？」

「どうしてでしょうね。私は人選に関わっていませんので」

男は眼鏡を外して指で拭いた。癖なのだろう。ふっと、息を吹きかけてこすっている。

「阿茶様って変わった名前ですね」

僕は言った。

「室町時代の人ですから」

「室町時代……」

歴史の年表を頭でめくる。みんなうろ覚えだ。

「世阿弥の命日が一四四三年八月八日と考えられています」。八月八日か……。とつくに忘れていた。

「阿茶様はその頃の人らしいです」

男は目をしょぼつかせて言った。ずいぶん昔の人だ。女の人だろうか？ 盃を飲み干して返杯すると、喋ることが何もなくなった。

男はこそそと、自分の席に戻っていった。

座敷は賑やかになってきた。落語家が庄屋にお酌をしている。恐怖のカラオケがセットされた。僕は自他共に認める音痴だ。もう帰ろうと思った。その時、和助さんが近づいてきて、僕の耳元で囁いた。

「準備が出来たようです」

渡り廊下に出たが、誰もついてこない。

「僕だけですか？」

先導する和助さんに声をかけた。

「そうです。そろそろ阿茶様が来られます」

本堂に入った。灯明が燃えている。本尊の前で老僧が一人読経していた。和助さんは僕の背後に座った。カラオケが聞こえる。あれは庄屋の声だ。

「村のものは供養に出ることはできません。私も村のものですから、お出でになりましたら、退出させてもらいます」

読経が終わり老僧が退場した。気づくと和助さんの気配も消えていた。風もないのに灯明の焰が揺れた。

― 誰かいる ―

灯明がぱちぱちと燃え、ひとときわ輝いて、ふっと消えた。真の闇になった。闇の中で誰かが息を潜めている。

「ふふっ」と笑い声がした。女の声だ。

「阿茶様？」

「そうです」

女の澄んだ声がした。いつの間にかカラオケの声も消えていた。遠くで聞こえていた盆踊りの音も消えた。全ての音が消えていた。障子が音もなく開いた。廊下に篝火の明かりがやっと届いている。薄明かりの中に女の気配がした。薄い薄い影のような気配だった。僕は立ち上がり女に近づいた。女の気配が動いた。同時に鈴の音がした。女は鈴を持っている。音が戻ってきた。僕は鈴の音を追った。盆踊りの音頭が聞こえた。だが、さっきのは違った

「念仏踊りです」

―早く来い来い 七月七日 七日過ぎれば
お盆様 仏の供養だ 南無阿弥陀仏 盆はうれしや 別れた人も 晴れてこの世に 会いに来る―

女は歌った。渡り廊下を鈴の音が通る。控室の障子が開いた。中にいるのはさっきの人々ではなかった。様々な人がいる。農民もいる。僧も侍もいる。女もいる。子供も老人

も。笑い、喋り、奇声をあげているのもいる。日本語に違いないのだが、単語がかろうじて分かるだけで言葉が理解出来ない。次の瞬間、人々は話を止め一斉に僕の方を見た。

「行きましょう」

女が耳元で囁いた。

小走りに門を通り抜け、川に沿う道に出た。川には灯笼が次から次へと流れていた。それは遠い昔から流れてくるようだった。次々に現れ次々に消えていった。闇から現れ闇に消えていった。僕はゆっくりと歩いた。女も歩を緩めた。鈴の音は神社に向かっていくように、だ。庄屋屋敷の門には提灯がぶら下がり、人通りが増えた。鈴にはぐれないように、人ぶつからないように歩くのはかなり難儀だった。だが、村人達にぶつかることはなかった。空気のように通り抜けることが出来た。

音頭が近づく。

―お月様でさえ　夜遊びなさる　ワシの夜遊び　無理はない―

女は笑った。僕も笑った。

境内に櫓が建っていた。その周りを村人が踊っている。何かが手に触れた。

「踊りましょう」

女が言った。そして、手を引かれた。

村人には女が見えているのだろう。なにやら話しかけたり、笑いかけたりしている。僕はそれが羨ましかった。女の踊る気配がする。風が舞っている。鈴が鳴っている。僕も見よう見まねで踊り出した。

― 盆はうれしや 別れた人も 晴れてこの世に 会いに来る 念仏するのは 仏の供養

田の草取るのは 稲のため―

女の気配が遠ざかった。鈴の音が聞こえた。

女が鈴を振っているのだと思う。

境内を出ると音頭は止んだ。振り返ると、誰もいない神社があった。巨木が闇の中にそびえていた。

鈴の音は村を通り抜けた。一面に青田が続き、その外れにぽつんとみすばらしい小屋が

あった。鈴の音が止んだ。深い沈黙が押し寄せてきた。

「私と母様は都から流れてきて、あの小屋に住んでいました」

女が言った。

「一軒、一軒、家の門に立って、母様が歌って私が踊りました」

急に寒くなった。頬に冷たくあたるものがある。「雪だ」。ふと小屋を見ると、畦道がある。四、五本の松明が近づいてくる。

「種粃を盗んだって言われました。蒔く土地もない私たちが」

小屋が闇の中で燃え上がった。

「熱い」

女は叫んだ。

いつの間にか補嚴寺に戻っていた。踏石を上がり、渡り廊下に腰を下ろした。部屋の灯りは消えていた。門の篝火がかすかに届く。その明かりに、庭の奥にある建物が見える。

あれが庫裡なのだろう。

「翁様^{おきな}」

女が言った。ぼんやりと白い単衣^{ひとえ}を着た男の後ろ姿が浮かんだ。

「翁様は私たち親子を寺に招き入れて下さいました。そう、あなたが座っているそこに腰を下ろして」

―踊り踊るなら　しな良く踊れ　しなの良い娘は　嫁にとる―

「母様が歌い、私は踊りました」

―阿茶は踊りが上手でございます―
奥様がおっしゃいました。

―ほんに、わしが教えたいものじゃ―
翁様が、おっしゃいました。

いつの間にか男の姿は消えていた。
月が庭を照らしていた。池のあたりがぼんやりと明るい。女の気配が遠のいた。鈴が鳴り、庭草がサワサワと動いた。僕は後を追った。

「池の面を見てください」

女の声がした。池に月が浮かんでいた。風が吹き、水面に細波が立った。薄い小さな影が流れた。――阿茶様だ――遠く離れた月が手の届く池面にあるように、六百年近い昔の人が近くにいます。鈴が小さく短く鳴って軽く肩を押された。振り返ると少女がいた。少女は小さくて痩せていた。粗末な着物を着ていた。所々に穴があき、黒く汚れた素肌が見えた。素足だった。髪はほつれているが赤い糸で括っていた。母様がしたのだろう。眉は濃く目は糸のように細長かった。その中に星のように輝く瞳があった。

「やっと会えたね」

僕は言った。

「楽しかった」

少女は言った。

「また、会えるかなあ」

僕は言った。

「もう、出会っているのかもしれませんが。過去と未来はつながっているのですから」

奇妙なことを言って、少女は笑った。笑うと左の頬にえくぼがあった。

「どこかで見たことがある―と思った瞬間、少女は消えた。」

「帰られたようです」

和助さんの声がした。

「今から五七〇年前、村人は乞食の母子を焼き殺しました。次の年から、飢饉が続き、母子の供養をすると収まったそうです。それが阿茶様供養のはじまりです」

二人は石畳を歩いた。

「翁様って？」

僕は聞いた。

「世阿弥様のことです」

和助さんは事もなげに言った。

「阿茶様供養ってどんなのだった？」

話しても信じてもらえないだろう。妻は、

風呂上がりの濡れた髪の毛を拭いていた。

「もう寝ているの？」

話を孫の方に振った。昨日から遊びに来ている。

「遊びすぎて爆睡よ。それで阿茶様供養は」

「あちゃ」

僕はおどけて言った。

妻は笑った。左の頬にえくぼが見えた。

第三話 世阿弥舞う

「補嚴寺からメールが来ている」

僕の独り言に妻が反応した。

「今度は何？」

「薪能だって」

「季節もいいし、きれいだろうな」

「行く？」

「行ってもいいのかしら？」

「別にかまわないんじゃない。でも、何で檀

家でもないのにお知らせが来るんだろう？」

「ダイジも違うし」と妻は言った。

ダイジとは大字おおあざのこと。家の住所にもつい

ていた。実際に書いたことはない。僕らは結婚してこの団地にやってきた。村がなくなつた今でも地の人は地域を大字で呼ぶ。妻は地の人間ではないが四十年も住んでいれば習慣に染まったのだろう。僕はいつまでたつても馴染めなかったけれど。僕は慣れない手つきでパソコンを操作してメールを読む。

「補巖寺参る。九月十九日、午後七時より。

薪能「世阿弥舞う」。シテ 世阿弥。並びに月見の会」

「お月見もあるのね。今年の中秋の名月は確か十九日よ」

妻が弾んだ声で言った。

九月に入ると、一斉に蝉は鳴くのをやめた。死んだ。でも、時々真夏日がある。妻は単衣か袷か迷っていた。九月も半ばを過ぎたのに、その日も暑かった。

「今頃、単衣は変かしら」といいながら単衣に決めた。

ドアホンが鳴った。妻が出た。

「お迎えに参りました」

和助さんの声がした。和助さんは半袖を着ていた。

外はまだ明るい。和助さんは妻に驚いたようだ。いつもの寡黙に輪をかけて地面を睨んで歩き出した。

「私も行っていいのかしら」

妻は屈託なく話しかける。

「誰でも」

「いいのね？」

「はい」

途中で同じ団地の奥さんに出会った。団地から出かけるのは国道の方に歩くのが普通なのにと、不思議に思ったのだろう。

「味間^{あじま}」

妻は答えた。

「へえ、知り合いでもいるの？」

「補巖寺に薪能を観に行くの」

「私も行きたい。ちょっと待って。旦那に言ってくるね」

こんな感じで、女は三人になった。姦しくなった。男はその前を黙々と歩いた。背後の二上山に夕日が落ちているだろう。前方の三輪山の方角から満月が上がっている。月に向かつて歩いた。やがて、薄い墨が空気に混じるみたいに闇が降りてきた。補巖寺のあたりが少し明るい。橋を渡る。地藏には蠟燭が燃えていた。今日はコスモスが供えてある。子供公園に人は集まりつつあった。老若男女、子供も多い。

ブランコに老人が腰掛けていた。老人は小さく、そして美しかった。口元に静かな笑みを浮かべていた。手足も小作りで子供のようだった。僕はなぜか孫の颯太を思い出した。眼差しが幼児のようだった。どこかで見たことがある。すぐに庫裡にいた老人だと思った。妻が隣のブランコに腰掛けていた。いつの間に追い抜いたのだろう。

「月は美しいのお」

老人は鎖をつかみ、体を後ろにそらし、ブ

ランコを小さく漕いだ。妻は老人の目線を追った。いつの間にか月は中空にあった。小さな村の外れにも、あまねくその光は降り注いでいた。寺で誰かが挨拶を始めた。町長選の時によく聞いた声だ。

「補嚴寺は町の宝でありまして」

「よく言うなあ、ほったらかしにしょって」

老人が言った。口元の笑みも柔和な眼差しも少しも変わらなかった。

「どちらにお住みですか？」

妻が聞いた。

「補嚴寺にお世話になっています」

妻は不思議そうな顔をした。補嚴寺は無住だと知っていた。

「お一人ですか」

「ほっ、ほっ、沢山といえるといえばそうだし、一人だといえば一人ですよ」

老人は、奇妙な笑い声を立てた。妻もつられて笑った。

「お食事も大変でしょう？」

「ほっ、ほっ、娑婆の人は大変だね。私は食べることもない、眠ることもない、しがらみが何もないのです。ほっ、ほっ」

妻は老人が正気でないと思ったのだろう。話を変えた。

「私、能は何にも知らないですよ。ノー」
「ほっ、ほっ」

親父ギャグが分かっているのだろうか？

「分かるように舞いましょう」

老人は言った。

妻は二、三回ブランコを漕いで、「はっ」と言って飛び降りた。代わりに僕がブランコに座った。町長の挨拶は終わっていた。静かな囃子の音が聞こえてくる。人々が門に向かっていている。

「始まりますよ」

僕は言った。

いつの間にか、老人は能面をつけていた。子供の面だと分かった。ずっと立ち上がった老人は童子どうじになった。

「月光がさしても目に見ることは叶わない。
月にうとく、雨の音も聞くことができない藁
家の暮らしは本当にわが身ながらもいたわし
いことだ」

謡いながら補嚴寺の門に消えた。

庭には篝火が燃えていた。竹で作った舞台
が渡り廊下から張り出して作られていた。舞
台を照らすように月があった。見事な中秋の
名月だった。冷たい光だった。

「渡り廊下は橋掛かりになっております。あ
そこを通って、シテ方があの世からやって来
ます」

耳元で和助さんが囁いた。橋掛かりの先は
本堂である。廊下には松の盆栽が三つ置いて
あった。鼓の音が鳴り始めると、ざわめきは
収まった。謡^{うたい}が始まる。さっと橋掛かりの幕
が上がると、童子の面をつけたシテがしずし
ずと廊下を渡り、舞台中央に歩み出る。先ほ
どの老人だろうが大きく見える。周りが縮ん
だといった方がよいのかもしれない。

「世阿弥様です」

和助さんが言った。

「それ青陽の春になれば 四季乃節會の事始

め……」

「鶴亀です」

さっぱり分らない。曲の調子が変わった。

シテはゆつくりと、実にゆつくりと下を向く。

面^{おもて}に月の影が宿り、表情が一変する。

「「蟬丸^{せみまる}」です。盲目のため帝^{みかど}から逢坂山に

捨てられた蟬丸と、狂い出た姉の逆髪宮^{さかがみのみや}が琵琶

の音にひかれて再会する場面です」

蟬丸はうつむき加減で舞う。蟬丸の盲目を

表現しているのだろう。それはとても悲しい

表情に見える。ひとしきり舞って蟬丸は橋掛

かりに消えた。

「逆髪宮です」

和助さんが言った。

橋掛かりから女面^{おんなめん}をつけた世阿弥が現れた。

まさに美しい女の人が舞い降りた。

「再会の場です」

和助さんは目頭を押さえた。泣いている。

調子が速くなる。くるりと舞うと蟬丸の面になる。逆髪と蟬丸がめまぐるしく変わる。逆髪がゆっくりと面を上げる。泣いている。僕は思わず「凄い」と声を出していた。またゆっくりと面を下げる。次に顔を上げると蟬丸の面に。いや、面ではなく、そこには再会に歓喜の涙を流す生身の姉と弟の姿があった。次に別れの場面に移る。僕は舞台に引き込まれていた。その時、妻の姿が目の隅によぎった。振り返ると、少女と手をつなぎ門に向かって走って行く。阿茶様だった。妻を追おうと思ったが動けなかった。舞台は蟬丸の舞いになっていた。正面を向いて、どんと足を踏み鳴らした。上からゆっくりと翁の面が降りてきた。蟬丸の面を外し翁につけ替える。「これやこの行くも帰るも分かれつつ知るも知らぬも逢坂の関」

そして、少し足を速めて、橋掛かりに消えた。一瞬に篝火が消えた。天上の月が誰もい

ない舞台を照らしていた。

「お送りします」

和助さんの声がした。

家に帰ると、妻は先に帰っていた。

「阿茶様とどこへ行ったの？」

「あの子が阿茶様なの」

僕は頷いた。

「とても楽しそうだった。私も楽しかったな

あ。神社に行ったの」

「神社、近くの」

「近くとか遠くとか、そんなの分からない」

「まあ、いいよ。神社へ行ったのか」

「大きな木があって、沢山いたよ」

「何が？」

「分からないわ。でも、子供よ。女の子も男の子も。木の枝に腰掛けたり、葉っぱから葉

っぱに飛び回っていた」

あの切り株だと思った。

「杉の木だね」

「知らない」

「まあ、いいよ。続けて」

「悪いけど、眠たいの」

確かに、妻の目はとても眠そうだった。

「それじゃ、明日聞くよ」

「ごめん、お休みなさい」

妻は二階に上がって行った。子供たちがみんな家を出て行って、小さな家も広くなった。

妻は二階で僕は一階で寝る。家庭内別居。

次の日、妻は、とても遅く起きてきた。急いで昨日の続きを聞いた。妻は何も覚えていなかった。自分が昨夜話したことも。

エピソード

薪能から何日か経って、僕は役場に住民票を取りに行った。戸籍住民係に和助さんが座っていた。こちらに向かって、ぺこりと頭を下げた。和助さんは、ちよう町の公務員だった……。
「住民票ですか？」

僕は頷いた。和助さんは書類を持ってカウンターのなかから出てきた。

「こちらにどうぞ」

連れて行かれたのは小会議室だった。テーブルが二つ、窓際にホワイトボード。

「この書類に必要な事項を書いて下さい」

用紙とボールペンを差し出した。女の職員が入ってきてお茶を置いた。特別待遇だなあと思うと、ちよつと緊張した。

「どうも先日はお疲れ様でした」

書き終わるのを待って、和助さんが言った。

そして、電話をした。

「住民票の手続きを頼む。ごめんね」

和助さんは戸籍住民係で少し偉いのだ。

「免許証か保険証かお持ちですか」

僕は免許証を渡した。和助さんは僕の前に腰掛けた。さっきの女の職員が入ってきて書類と免許証を持って行った。ノックもせず無言だった。ちらつと和助さんを睨んだ。

「補蔵寺のことは町の仕事ですか？」

なにもかも仕組まれた演出かもしれない。

そんな疑惑が頭をよぎった。

「ええ、そうです」

和助さんは即答した。

「不思議な体験でした」

僕は言った。

「何かあったんですか？」

和助さんは首をかしげた。考えれば、不思議なことが起こった時、和助さんはいなかった。和助さんはなにも見ていないのかもしれない。

「行事には金を使わないが業務命令でして。

なんせ、町は毎年赤字でして。今度も、私の超過勤務まで上司に文句を言われました」

和助さんは前と打って変わって饒舌だった。

「でも、超過勤務手当で家族で焼き肉に行きましたよ。ささやかな役得です。私は和食の方が好きなんですけれどね。一番下のガキが肉が好きで」

「お子さんは何人ですか？」

僕も愛想の質問をした。

「三人です。女ばかりで」

その時、音もなく、また、女の職員が入ってきて、僕の前に書類と免許証を置いた。僕は席を立った。和助さんは役所の出口まで送ってくれた。僕には気になっていることが一つあった。

「虎追いの時の女性のことですが」

僕が聞くと和助さんは怪訝な顔をした。そうして、こう言った。

「虎追いに女はいませんよ。男ばかりの行事です」

車を一旦停止の標識で止めると、バックミラーに、手を振っている和助さんが見えた。僕もパワーウィンドウを下ろして、手を振った。

了

奥付 平成二十五年十月十六日（水）

平成二十五年十月十七日（木）